

北海道の労働と福祉を考える会 2001年度 総会

プログラム

開会の挨拶……………山内太郎

1．今年度の活動を振り返って……………南部葵

2．一年の活動の紹介

2-1 支援企画……………佐藤学

2-2 生活保護申請……………南部葵

2-3 広報活動……………古澤明

2-4 エルム問題……………山内太郎

2-5 夜回り……………埴朋子

2-6 仕事説明会……………諏訪絢子

2-7 人数/聞き取り調査……南部葵 小西祐馬

3．来年度の方向性……………山下未知瑠

4．会計報告……………藤堂美紗子

～休憩～

5．質疑・応答（学生の声を含む）

6．来年度役員の紹介

閉会の挨拶……………椎名恒

1. この1年の活動をふりかっ

南部 葵

「こんな雪のふる札幌に、路上で生活している人たちがいる。それもみんなそれぞれの事情があつてのことだ。ただ見過ごすことは簡単だけど、私たちにも何かできることはあるのではないか」、そんな素朴な思いからこの会がはじまったのが、2年半前のことです。昨年度は山内事務局長のもと、「路上生活者に対してこの会がどのようなスタンスをとるのか、最終的にはどのような状態になることがこの会の目的なのか」という議論が約半年繰り返され、その結果「路上生活という状態に対してひとつの生き方であるという点は認めながらも、やはりその生活はあまりにもリスクがあるので、できることならそうでないほうがいいと考える」という立場にたつて、「継続的に関わっていこう」という見解が出されました。

今年度はその方針に基づき、「どのようにして私たちが関わっていくのか」ということが最大の焦点であったかと思ひます。「すばらしい実践を行なっている人は、おのずからすぐれた理論を持ちあわせていく」という言葉があるように、私たちが路上で生活している人たちと関わっていこうとしたとき、まずは、当事者の人たちと接する機会を増やすことを最優先とし、実践をとおして路上生活者の問題に取り組んでいこう、そして、そこからこの会がこれから歩むべき道が少しでも見出せていければ、というのが今年度の活動の原点にあったといえます。彼らのことを知らずに議論をすすめてもはじまらない、さまざまな活動を通じ、その都度生じた問題に対して最善と思われる方法をもって取り組んでいくことが、それを繰り返していくことが路上生活者問題を解決に向かわせていく一番の近道になるのでは、そんな姿勢で臨んだ1年でした。

これまでとは違う新たな取り組みとしては、当事者の方と接するきっかけを増やした夜回りや、生保とは違うかたちで脱路上を試みた仕事説明会などが挙げられます。これらは今後の可能性を広げると同時に多くの課題を残す結果ともなりました。また徐々に対応が厳しくなる生保申請や札幌の路上生活者の実態を知るのに欠かすことができない聞き取り調査の実施、突然のことで話題を呼んだエルム問題などについても、学生がより積極的に行動した1年でもあったといえます。ここにこの1年の活動を振り返りながら、今年度の課題についてもう一度整理しなおし、来年度にむけての総決算を行なっていきたいと思ひます。

2. 一年の活動の紹介

2-1 定例支援企画について

佐藤 学

00 はじめに

ここでは定例支援企画についてのまとめであるが、この企画は生保申請や調査、就職説明会など他の活動とも深く関わりがある。今回はそれらを考慮したまとめではなく、支援企画のみを中心にまとめることにする。

01 概要

定例支援企画は労福会設立当初から、二ヶ月に一回を目標に継続的に行っている企画である。今年度は第 11～15 回の 5 回実施することができた。その内容は健康上の不安に関して専門家が対応する**健康相談**。ここでは尿検や血圧測定など簡単な検査も行う。

路上で生活する上での悩み事を相談する**生活相談**。これは参加した学生が当事者との交流を深めるという目的もあり、学生中心で行われる。しかし、話の内容に関して専門的な知識が必要な場合には教官などにつなげることがある。そして、おにぎりや豚汁、フロ券、生活用品などの**物資配布**も行っており、当事者からは非常に好評である。さまざまな所から衣類の寄付もあり、その配布も行っている。また、生活保護制度についての説明とその申請など、生活保護の利用の呼びかけも行ってきた。この点については南部からの報告があるのでここでは割愛する。

02 各支援企画内容

それぞれの支援企画の内容等については表 1 を参照。全体としては参加人数も 80 名前後と安定しており設立当初からの継続的な活動の表れではないかと思われる。

表1 定例支援企画

| | 日時 | 会場 | 参加人数 | 主な活動 |
|------|---------------------|----------|------|--------------------------------|
| 第11回 | 6 / 2 14:00 から | 市民 会館 | 82 | 物資配布・生活相談・健康相談・落研・生保申請 |
| 第12回 | 8 / 11 14:00 から | 市民 会館 | *** | 物資配布・生活相談・健康相談・落研・生保申請 |
| 第13回 | 10 / 13 18:00 から | 市民 会館 | 82 | 物資配布・生活相談・健康相談・エルム報告・就職説明・生保申請 |
| 第14回 | 12 / 1 18:00 から | 市民 会館 | 53 | 物資配布・生活相談・健康相談・落研・生保申請 |
| 第15回 | 2 / 23 18:00 から | 市民 会館 | 80 | 物資配布・生活相談・健康相談・落研・生保申請 |

03 現状と課題

課題として昨年度からあげられているのは、生活保護受給の困難さ、保護受給後のフォローアップ、生活保護制度に関する学生の知識不足、企画への参加が困難な当事者への対応である。これらは支援企画での課題というよりは他の活動、生活保護申請や夜回りなどの新しい活動のなかで取り組むことである。労福会の活動全体のなかでこうした課題を担う活動が生れてきたことは一つの進展ではないかと思われる。

こうした課題の他に、支援企画自体での問題としては「他の団体との連携」と「マニュアル」の問題がある。

他の団体としては、静山荘と北大落語研究会の存在があげられる。この二つはどちらも成功例として考えているのだが、支援企画を学生の力のみで運営しようとするものの限界がある。現実問題として学生にはそれぞれの事情があり、会への関わり方もそれぞれである。毎回の企画ごとに反省し、よりよい企画作りを目指すこと自体は必要なことであるが、できること、できないことの見極めも大切である。できないこと、負担の大きいことは他の団体にその可能性を見出す方向で考えていかなければいつか無理が生じてくるように思われる。実際、静山荘の協力はそれまでの学生の負担を解消するだけでなく、物資の質自体がよくなったと思う。また、落研の協力なしには余興という催し物自体が成り立たない。しかし、そうした団体への説明、結果報告など十分とはいえないものであった。

2点目の「マニュアル」に関しては、特定の学生しか知らないことが多いという問題がある。きちんとした引継ぎが困難な場合や担当者が関われない場合に企画自体が行えなくなる危険性があるし、それまで積み上げてきたものが白紙になってしまう。この点を考慮し、今年度はマニュアルの作成を試みた。しかし、その内容も十分なものとは言えず、今後、内容の吟味が必要かと思われる。

以上が支援企画担当としてのまとめになる。

2-2 生活保護申請

南部 葵

路上生活者が路上での生活から抜け出す手段のひとつとして、生活保護制度の利用があります。住所不定のため仕事を見つけることが困難であったり、頼れる親族が身近にいないことが多い当事者にとって、この生活保護を受給していったん居宅生活に戻ってから仕事を探して自立した生活をはじめることが、今のところ脱路上をする際に有効であるといえます。

現在札幌市では、確定した住所を持たない人たちに対して生活保護を認めることは難しいという立場をとっており、路上生活者に対する行政側の対応としては、「当事者が行政の窓口まで来てさえくれればできる限り対応していきたい」ということでした。具体的には、住所を確定させるため救護施設に一時的に入居してもらうことや、検診命令によって健康状態が悪い人に病院での検査をしてもらうことなどが主なものとしてあげられます。しかし、路上生活をしている当事者にとって、自分ひとりで行政機関の窓口に行き、ケースワーカーの方と話すということは、なかなか容易なことではありません。そこで生保申請に同伴を望む当事者には学生が同伴していこうというのが、生保申請同伴のはじまりでした。

私たちは前述した定例支援企画のなかで、生活保護制度についての説明を行ないます。当事者にとって、生活保護に関する正確な知識をもってもらうことがまず重要だと考えているからであり、その後ひとりで行政窓口に行った人も多くいます。しかし、学生同伴を希望する人たちも多数おり、そういう人たちに対して、翌週の月曜から生活保護申請相談というかたちで札幌市内の各区役所をまわりました。生活保護受給につながるまでには、現在おもに3つのパターンがあります。ひとつは、救護施設に一時的に入居し住所を確定してから、そこで生活保護の申請をする方法。次に、病院に入院した場合その病院を住所として生活保護申請をする場合。最後に、入居時に保証人や諸費用を払うお金がない人でも部屋を借りられるアパート等を何とか探して借りて、そこを住所として申請するものです。これらは各当事者の状況に応じて、最適な手段を選んで行なうようにし、その生活保護申請同伴結果を表2にまとめました。

今年度は生活保護申請同伴総数が、のべ53件（同人物が複数回の場合も含む）。そのうち生活保護の決定が下りたのが22件で、残りは相談の段階で門前払いになった人や、交通費等が支給されて親族のもとに帰されたケースなどがあります。救護施設は冬期間に路上生活者用として3名分だけ部屋が用意されており、そこに空きがある場合のみ入ることが可能になってます。しかし、3名枠ではとても足りないという現実や、入院をする際にも事情をこちらから話して、病院側の理解がなければなかなか難しいということ、また、入居時に保証人や諸費用の後払いが認められるアパート等を探すことが困難であることなどが課題としてあげられます。このような課題を少しでも打破すべく、2001年6月に保護指導課と当会との間で話し合いが行なわれ、そこでは以下のような説明が行政側からだされました。

～夏の生保に関する方針について～

野宿者が生保を受けられる条件

- ・住所があることが望ましい（自立助長のためには住所が必要）
 - ・住所がなければ保護しないというわけではなく、当事者の緊急性に応じて住居を確保し、保護を適用する
 - ・浮浪者とホームレスの違い（長期の野宿生活者という基準による分類）によって施設入所できるかどうかが違うというものではなく、あくまで緊急性を考慮する
 - ・施設はもともとホームレスのためのものではないし、ホームレス入所のための明確な条件は提示できない。面接室での判断による
- * 本人の稼働能力や扶養義務はどこまで求められるのか
- ・本人に面接室で話を聞いて、今までの生活でどれだけの努力が認められるか
 - ・扶養義務は保護に優先するが、その人の状況によってそれは変わってくる（緊急性）
 - ・あなたがた（労福会）がもう少し当事者の今までの生活状況を聞いて、それから役所で相談したほうが「この人はこういう努力もした」という話を役所でできるのでは？（あくまで面接で話すのは当事者本人）

上の条件を満たさない野宿者に対して 生保の枠を離れることも含めて

- 1) 通院する必要のある人：保護受給者ならば通院費はでる。ホームレスが検診書で検査を受けた後、治療行為になったときはその費用は保護費でまかなっている。
検診 入院となる人が緊急性のある人という判断で、ホームレスのまま通院費をもらって通院という形はない。
- 2) 住居があれば保護できるとすれば...：住所があれば保護を出すことは可能。いつでもにいるかわからない人に対して保護を出すことはできない。
- 3) 就労を希望し、かつ可能な人：現在はホームレスよりも季節労働者を優先して考える。

これらの懇談結果から、路上で生活している人たちが生活保護を受給できるための明確な条件が明らかでないということがわかり、そのことが当事者の人たちも、私達同伴する学生にとっても、大きな問題になっています。したがって路上生活者を生活保護につなげる際の制度上の障害が続く限り、今後も困難が予想され、私たちとしては、継続的に行政側と話し合っていく必要があります。

表 2-1 2001 年度 生活保護申請同伴結果

| 企画日 6 月 2 日 | | | | | |
|-------------|----|-------|-------|------|------|
| ケース番号 | 性別 | 担当学生 | 結果 1 | 結果 2 | 結果 3 |
| 1 | 男 | 小西 | 検診 | 入院 | 居宅保護 |
| 2 | 男 | 諏訪 | 検診 | | |
| 3 | 男 | 鈴木 | 検診 | 入院 | |
| 4 | 男 | 田尾 | 交通費支給 | | |
| 5 | 男 | 近藤 | 居宅保護 | | |
| 6 | 男 | 南部 | 相談 | | |
| 7 | 男 | 坪田・浅川 | 交通費支給 | | |
| 8 | 男 | 古澤 | 検診 | 入院 | 居宅保護 |
| 9 | 男 | 山内 | 検診 | 入院 | |
| 10 | 男 | 南部 | 相談 | 椎名仕事 | |
| 11 | 男 | 小西 | 検診 | | |
| 12 | 男 | 坪田 | 相談 | | |
| 13 | 男 | 人見 | 相談 | | |
| 14 | 男 | 山田 | 相談 | 椎名仕事 | |
| 15 | 男 | 柿崎 | 相談 | | |
| 16 | 女 | 浅川 | 相談 | | |
| 17 | 男 | 浅川 | 相談 | | |
| 18 | 男 | 光本教官 | 検診 | 入院 | 居宅保護 |

表 2-2 2001 年度 生活保護申請同伴結果

| 企画日 8 月 11 日 | | | | | |
|--------------|----|----------|------|------|------|
| ケース番号 | 性別 | 担当学生 | 結果 1 | 結果 2 | 結果 3 |
| 19 | 男 | 諏訪・坪田 | 検診 | | |
| 20 | 男 | 小西・坪田・浅川 | 検診 | 入院 | 居宅保護 |
| 21 | 男 | 小西・諏訪 | 相談 | 入院 | 居宅保護 |
| 22 | 男 | 小西 | 相談 | | |

表 2-3 2001 年度 生活保護申請同伴結果

| 企画日 10 月 13 日 | | | | | |
|---------------|----|------|------|------|------|
| ケース番号 | 性別 | 担当学生 | 結果 1 | 結果 2 | 結果 3 |
| 23 | 男 | 小西 | 年金受給 | 居宅保護 | |

表 2-4 2001 年度 生活保護申請同伴結果

| 企画実施日 12 月 1 日 | | | | | |
|----------------|----|-------|-------|------|------|
| ケース番号 | 性別 | 担当学生 | 結果 1 | 結果 2 | 結果 3 |
| 24 | 男 | 川内 | 相談 | | |
| 25 | 男 | 中島 | 相談 | | |
| 26 | 男 | 人見 | 相談 | | |
| 27 | 男 | 塙 | 居宅保護 | | |
| 28 | 男 | 佐々木朋 | 検診 | | |
| 29 | 男 | 佐々木朋 | 交通費支給 | | |
| 30 | 男 | 近藤・諏訪 | 相談 | 居宅保護 | |
| 31 | 男 | 小西・南部 | 居宅保護 | | |
| 32 | 男 | 小西・南部 | 居宅保護 | | |
| 33 | 男 | 人見 | 相談 | | |
| 34 | 男 | 北川 | 相談 | | |
| 35 | 男 | 坪田 | 相談 | 居宅保護 | |
| 36 | 男 | 坪田 | 相談 | 居宅保護 | |
| 37 | 男 | 塙 | 相談 | 居宅保護 | |
| 38 | 男 | 南部 | 相談 | 居宅保護 | |
| 39 | 男 | 南部 | 検診 | 入院 | 居宅保護 |
| 40 | 男 | 古澤 | 検診 | 入院 | 居宅保護 |
| 41 | 男 | 山田 | 相談 | | |
| 42 | 男 | 中田 | 相談 | | |

表 2-5 2001 年度 生活保護申請同伴結果

| 企画実施日 2 月 23 日 | | | | | |
|----------------|----|----------|------|------|------|
| ケース番号 | 性別 | 担当学生 | 結果 1 | 結果 2 | 結果 3 |
| 43 | 男 | 藤堂 | 相談 | | |
| 44 | 男 | 南部・小野木 | 検診 | 入院 | 居宅保護 |
| 45 | 男 | 佐々木朋 | 検診 | | |
| 46 | 男 | 小西 | 検診 | | |
| 47 | 男 | 小野木 | 検診 | | |
| 48 | 男 | 小西 | 居宅保護 | | |
| 49 | 男 | 南部・安部・太田 | 相談 | 居宅保護 | |
| 50 | 男 | 南部・安部・太田 | 相談 | 居宅保護 | |
| 51 | 男 | 南部・安部・太田 | 居宅保護 | | |
| 52 | 男 | 南部 | 相談 | 入院 | 居宅保護 |
| 53 | 男 | 塙 | 交通費 | | |

表 2-6 2001 年度 生活保護申請同伴結果

| 企画実施日 | 相談総数 | 男性 | 女性 | 相談 | 検診 | 入院 | 交通費 | 生活保護 | その他 |
|-----------|------|----|----|----|----|----|-----|------|-----|
| 6 月 2 日 | 18 | 17 | 1 | 6 | 3 | 4 | 2 | 4 | 2 |
| 8 月 11 日 | 4 | | | 1 | 1 | 2 | 0 | 2 | 0 |
| 10 月 13 日 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 12 月 1 日 | 19 | 19 | 0 | 7 | 1 | 2 | 1 | 10 | 0 |
| 2 月 23 日 | 11 | | | 1 | 3 | 2 | 1 | 6 | 0 |
| 合計 | 53 | | | 15 | 8 | 10 | 4 | 22 | 3 |

2-3 広報活動

(1) 広報活動における HP の現状とこれからの課題

古澤 明

現在、北海道の労働と福祉を考える会では、広報活動の一環として、HP (<http://members.tripod.co.jp/roufuku/>) を公開しております。ここでは HP の現状と、これからの課題と展望等について述べさせていただきます。

1. HP 設置の目的

A. 広報活動における会報の補完の目的

- ・「情報の頻度」、「情報の伝達範囲」、「情報の一方向性」という会報の限界を補う

B. 事務局連絡の補完の目的

- ・事務局連絡として ML があるが、ML に参加していない人にも情報を伝える

2. HP の現状

A. HP の内容

この会の活動内容についての説明、会の規約、定例支援企画について（まだ作成していません）、生活支援物資の在庫状況、会報「ともに生きる」のバックナンバー、会員募集・カンパのお願いと振込先の紹介、メーリングリストについての説明、掲示板、リンク、問い合わせ先の紹介

B. HP の役割

- ・対外的な会の説明
- ・協力・連絡体制の補助
- ・事務連絡伝達・会内外の情報交流

3. HP の今後の課題と展望

A. 課題

広報内容が会報に追従しているだけで、情報更新の頻度が遅い

工事中の「定例支援企画」の早期開設。HP 独自の広報内容の検討、リンクの拡充
事務局連絡も定期的に伝えていない

事務局会議議事録の掲示板への頻繁な書き込み、HP 公開範囲のガイドライン策定
スポークスマンの不在、会の活動内容の情報収集不足

会の連絡先の統一、管理人の役割の検討（連絡対応、原稿作成、HP 維持・管理）

B. 展望

他団体との、活動内容にリンクした連携体制を図る

健康生活相談会、生活保護同伴、アパート情報、ボランティア人材、募金...

会の事務活動の増加が問題、当面は事務局員の確保のための広報活動が必要。また広報担当が増えるのであれば、会報・HP といったメディア単位でなく、活動内容を単位にした役割分担が必要。

(2) 広報活動における会報の現状とこれからの課題

山田 敏之

1. 会報の目的

- ・会の活動を、一般会員及び市民に広く知ってもらうこと

2. 会報の現状

- ・第5号及び臨時号の2回発行
- ・内容は極力感想よりも、事実を伝えることに重きを置いた

3. 前年度と比べて ~ 課題と展望 ~

- ・前年度は4号に加えて臨時号が発行されている。ただ発行回数は明らかに減っている。その理由としては「担当者の会への参加の少なさ」があげられる。その場合、原稿依頼をするなどして発行を試みるべきであったが、「原稿依頼を頼まなかった」こともあげられる。もっと積極的に依頼すべきであった。また「編集を一人で行ったこと」も問題である。会報の発行は想像以上の負担であり、個人ではまかないきれない。また来年度への引継ぎについても一から行わねばならないことも、来年度の課題である。
- ・現在、HP が非常に充実していることを踏まえると、むしろこれからは会報はHPの補完を担うべきではないか。HP を見ることが出来ない人に対して、提供を試みるべきであろう。HP と会報のあり方についてもぜひとも、総会を通じて検討いただきたい。

2-4 札幌市による「エルムの里公園」の退去要請を振り返って

山内 太郎

2001年10月10日、札幌市は12月から着工予定の公園改修工事を理由として、「エルムの里公園」でテントを張って居住する野宿者16名に対して、11月末までに立ち退くよう要請しました。

私たちがこのことを知ったのは、エルムの住人に対する正式な退去要請が行われる前日（10月9日）のことで、市の保護指導課との意見交換会においてでした。市の基本的な考え方は退去のめどを11月末日とすること、11月末日に向けて各区の保護課から職員を派遣し、退去後の生活について相談に応じるという2点に整理できます。相談活動は10月10日から3日間の午後に実施され、その後も必要に応じて随時相談を行われたようです。この相談を通じて、本人が希望する限り、また本人の事情に応じて生活保護制度を使って、病院での治療、施設（救護施設）への短期的かつ臨時の入所、アパートでの生活保護を利用した生活に至る道を模索することになるのですが、結論から言えば、札幌市ではじめての正式な「退去要請」は、「強制排除」的な様相を呈することなく、公園の住人16名全員がアパートで冬を越せることになりました。

市のこれらの対応について積極的に評価できる点として、まずエルムの住人に対して有無を言わさない理不尽な退去要請ではなく、その後の生活を含めた相談をした上で対応した点を挙げることができます。公園の住人全員が生活保護の利用を含めて脱路上を図ることができたのは、市の（これまでと比べて）丁寧な説明があったことは大きな要因といえます。また、生活保護の受給に向けて私たちの会やこれまでにエルムの里公園で「炊き出し」などの支援をしてきた教会と連携してことを進めようとした点も評価できる点といえます。例えばエルムの住人が病院や施設に入っている間、生活用品等の荷物を会が預かるなど、行政がなかなか対応できないところを民間の支援団体が行うという、今後の路上生活者問題を解決するにあたって行政と民間団体の関係のあり方を考えていく上で一つの方向性を示すきっかけとなったと考えることもできます。

しかし、一方でこれらの対応がエルムの里公園に住む路上生活者のみにしか行われなかったという点については大きな問題であるといわざるを得ません。周知のように札幌市に存在する路上生活者はエルムの里公園だけでなく、札幌駅周辺や大通公園周辺などにも数多く存在し、彼らが生活上抱えている問題はエルムの住人同様に深刻なものであることは間違いのないといえます。であるのならば、エルムの里公園における市の対応は、札幌市に存在する路上生活者全員に対しても開かれているべきであり、そうなるのはじめて市の路上生活者支援施策として評価できるものとなるのではないのでしょうか。

総じていえば、この「札幌市によるエルムの里公園の路上生活者への退去要請」をめぐる市の対応はこれまでにない積極的な側面をもつものでありながら、エルムの里公園内の問題にとどまり、札幌市における路上生活者への対応としての普遍化が図られるものでは

なかったというのが、私たち「北海道の労働と福祉を考える会」の見解です。しかしながら、今回の市の対応に見られた民間団体との協力体制を模索する姿勢は大きく評価できることであり、今後も市との連携を深めながら、なおかつ路上生活者支援施策についての意見交換を粘り強く行っていくことで、路上生活者問題に対する市の対応が改善されると確信した出来事でもありました。したがって、今後も市との関係を継続的に保つことが重要であることは間違いのないといえます。

2-5 夜回りの報告

埴 朋子

今年度は昨年度までにはなかった新しい活動として「夜回り」を始めました。昨年夏の実態調査で、会の活動について知らない人が多いことや支援企画にこられる人は路上生活者の一部であるということがわかったことから、10月の会議で冬対策の1つとして提案されました。提案がされてから事務局会議では、会としての支援のあり方や路上生活者とのかわり方とも関連して、「どこまで支援をするのか？」などの議論がなされ、賛否両論ある中でまずは試験的に行ってみようということになり、11月14日事務局会議終了後に第1回目が実施されました。

当初の基本的な目的は「まず声をかけてみよう」ということで、健康状態、悩み事や困っていることをたずね、1ヶ月後に予定されていた次回支援企画についてのお話などをすることにしました。

内容

2～3週間に一度くらいの間隔で、これまでに計6回、事務局会議終了後19:30～22:00の時間帯に実施しました。場所は、札幌駅、大通り公園近辺、大通り地下街、河川敷などで、2～3人1組になりその日参加する人数に応じて3～4つの班に分かれて回りました。お話を聞く際には近くのコンビニや自動販売機で温かい飲み物を購入し、持っていきました。また、12月には1度手作りの温かいお汁粉をもっていきました。夜回りの内容や感想などは各班でMLに報告することにしました。

反省

これまでにお話をした方はのべ 140 人近くで、夜回りを続けていくにつれ 1 つの班でお話を聞く人数は徐々に増え現在は 1 回で 10 人前後となっています。夜回りに対する当事者の反応は、「寒いのにご苦労様」「ありがたい」という声が多く聞かれ、お休み中で話し掛けることができない方やお話してくれない方もいらっしゃいますが、はじめて会の存在を知ったという人も多く、健康状態ということだけではなく世間話をしたり、個別にじっくり相談になったりと様々です。

また、参加者からは「ゆっくり話を聞けるチャンスだ」「いろいろな話が聞ける」「企画にこない人とも話せる」という感想がだされ、「無理のない範囲でこれからも続けていこう」ということになりました。

夜回りという活動によって、当事者のニーズの掘り起こしや、会を知らない人や企画にこない人・これない人とののかかわり、また、これまでの活動の中心である支援企画との関連では、これまではそっと置いてくるが多かったビラ配りや企画の宣伝を顔が見える関係においてできること、企画にかかわらず継続的な当事者とのつながりや、生活保護申請同伴のフォローなど、これまで「断続的」であった当事者とののかかわり方が、以前よりも顔見知りの関係でのつながりが作られてきているようにも思います。

2-6 仕事説明会（9月29日実施）について

諏訪絢子

昨年9月、市内のある会社から「路上生活者の方を10名ほど雇いたいので紹介してもらえないだろうか」という申し出を受け、9月29日（土）札幌市民会館において、労福会としては初めての「仕事説明会」なるものを実施した。当日はこの話に興味を持った当事者の方が17名訪れ、会社の社長から直に雇用についての詳しい説明がなされた。結局参加者の殆どが、就職を希望し、会社側が日を改めて面接を行なった結果、5名の採用が決まった。

説明会実施に踏み切ったのは、札幌市内に100名近くいる路上生活者の中から、会社のニーズに合う就労希望者をこちらの独断で10名ほど選び出すことの困難さと、出来るだけ多くの方に雇用のチャンスを提供しようという意図があったからである。

また、本会は2001年の冬から自立支援の一環として学生による生活保護申請同伴をおこなってきたが、回数を重ねていくにつれて当事者と共にそのハードルの高さを身をもって体験する中で、このような雇用の情報を当事者に提供していくことが新たな支援の形としての可能性を有するのではないかという考えもあった。

しかしながら、本会初の試みということもあってなのか、実施については特有の問題点が浮上した。まず、「職業紹介」の資格を持たない本会がこうした説明会を行なうのは法律に反するのではないかという問題が生じ、これについて本会は、あくまで会社と当事者を

つなぐための場を提供するだけで当事者の就職についてそれ以上の介入はしない、という形をとることで回避した。さらに、冒頭で 5 名の方が採用になったと述べたが、その後会社と当事者との間でトラブルがあり、12 月の支援企画を行なった時点では全員が仕事を辞めていた。

これらのことを反省材料として今後どう活かしていくか、については会の中のほんの一部でしか議論がなされていない。少ないながらも依然として 2, 3 の企業から類似の話が来ていることを考えると、これに対し会としてはどのようなアプローチをすればよいのか慎重に話し合っていく必要があるだろう。

2-7 人数・聞き取り調査

南部 葵

今年度の夏の人数確認調査は「北海道の労働と福祉を考える会」の会員および有志を含めた 20 名で、7 月 14 日（土）午前 6:00～午前 8:00 の二時間にわたって行なった。調査方法については基本的に前回と同じであるが、今回は参加人数が若干少なめであったために、調査場所を減らし、また回数についても、6 時から実施のみとした。従来はもっと早い時間（4:30 頃）から調査を実施していたが、このときはこの後に聞き取り調査を実施する予定もあり、調査者の負担軽減のため、一回とした。

また、冬の人数確認調査は、11 月 10 日（土）午前 4:30～午前 6:00 までの一次調査と午前 6:00～午前 8:00 までの二次調査を行った。以上の結果をこれまでの結果とまとめて、以下の表 3 で報告したい。

表3 人数確認調査

| | 2001 冬 一次 | 2001 冬 二次 | 2001 夏 | 2000 冬 一次 | 2000 冬 二次 | 2000 夏 一次 | 2000 夏 二次 |
|--------|--------------|--------------|--------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 札幌駅近辺 | 32 | 22 | 39 | 42 | 40 | 50 | 35 |
| 大通公園近辺 | 14 | 29 | 44 | 26 | 50 | 45 | 44 |
| すすきの | 4 | 4 | 14 | | 4 () | | |
| 中島公園 | 1 | 1 | 6 | | 4 () | 2 | 7 |
| 豊平川河川敷 | 3 | 3 | 6 | | | | |
| 円山公園 | 1 | | 2 | | | | 8 |
| その他 | | 1 | | | 5 | | 8 |
| 計 | 55 | 60 | 111 | 68 | 99 | 97 | 102 |

《表3及びグラフの項目などの詳細について》

札幌駅周辺…… J R 札幌駅構内、駅前バスターミナル、エルムの里公園

大通公園周辺……大通公園、バスセンター、地下街、狸小路

その他……… J R 各駅（桑園、琴似、新琴似）真駒内公園、

地下鉄（南北、東西、東豊）各駅

当時の調査ではすすきのと中島公園あわせて4名とした

エルムの里公園での強制撤去の影響などで、2001年の冬の調査では人数が減少したかのようと思われるが、夜回りや支援企画を通じて、また新たに路上生活をはじめざるをえない人たちが増えてきているという現実がみえている。したがって調査の結果から、安易に札幌の路上生活者が減ったとは言いきれない。

< 旭川聞き取り調査 >

昨年の12月14日と15日の両日、学生と教官併せて14名で旭川のホームレス調査を行った。調査方法としては、旭川市が昨年11月に行なった聞き取り調査を元にして、その中で会が聞き取りをするという方法をとった。

その内容を見ると男性が7名・女性が1名で、年齢層も50代周辺が多い。出身は地元旭川周辺が最も多いが本州や九州出身者もあり、住所を転々とした人が多いことも資料から伺える。野宿期間は1年から10年と長期の人がいる一方、2週間や3ヶ月と路上に出たから間が無いという人もいる。また数人のホームレスと一緒に生活したり、他からの支援を受けたりして外部との繋がりを持っている人がいるが、反対に他との接触を拒んでいる人もいる。また仕事や生活保護を希望する人も多いことがこの結果から伺える。

3. 今後の方針について

山下 未知瑠

「労働と福祉を考える会」として、この一年間札幌で暮らす路上生活者の実態を調査し、自立を支援してきたわけだが、積極的に活動してきた反面課題や限界が見えてきた一年であった。

去年の方針として、この北国北海道においては、路上で生活するよりも住む家があるほうがいだろうという前提から、脱路上をサポートすることで社会的な自立につなげていくことを目指したが、無事生活保護申請が受理されて路上から抜け出した人が増えるにつれて、孤独、深酒、賭博、また規則正しい生活ができないなど、様々な問題が出てきて、脱路上が必ずしも自立につながるとは限らないこと、また自分達がどこまで関われるのか、関わっていくのかが問われることになった。

また、生活保護申請そのものに関しても生活保護法の現在地保護を楯に区役所に同伴しても、住所がなければ保護は出せないという慣例を前に容易には成功しない。区役所側に、年齢や経歴、病歴等の明確な判定基準もなく、面接員によって通り易さが異なることにも当事者共々困惑している。

だから今年はホームレス問題に関心を持っているアパート経営者や、同様の活動をしている他の外部機関と協力し合うことで、脱路上を望む路上生活者が福祉支援を受けやすくなるよう、新たなやり方を検討していく。

それに最初に述べたように、脱路上そのものが自立であるわけではないこと、そもそも「自立」という言葉は、「他の援助や支配を受けず自分の力で身を立てること」を意味するのであって、本来「支援」という言葉とは相反する意味を持つものである。したがってただやみくもに自立支援を叫び、相手の要求に対して出来る限りのことをやるのが自分たちの義務であるかのようになることは、支援者と非支援者、という構図が露骨に固定されることになり、それは自立した個人の対等な関係とは最もかけ離れたものとなる。

無論そうした構図はこの活動をしていく上で時に必要であるが、今後何をもって支援とするのか、また当事者と我々、自立することと支援すること、その双方の距離について考えていくことが、我々にとっても当事者にとっても与える側、受ける側という不均衡な関係ではなく、自ら立つということに向かっていけるのではないだろうか。だから、今まで会議では専ら实际的な計画を中心に話してきたが、それに加えて自立支援のあり方についてもより互いの考えを交換していきたい。勿論各々の考え方は千差万別で、共通の認識には至らないだろうが、当るも八卦当らぬも八卦、若く、多様な個性がぶつかり合って、労働と福祉を考える会としての意識を固定せず、発展させていくことになるはずだ。

4. 2001年度決算報告(2001年3月7日から02年3月13日会計)

藤堂 美紗子

| | | |
|--------------|------------|-----------|
| * 前年からの繰り越し | | 893,233 |
| * 収入 | ・ 会費 | 175,000 |
| | ・ カンパ | 210,687 |
| | ・ 共同募金会様 | 700,000 |
| | ・ 銀行利息 | 150 |
| | 計 | 1,085,837 |
| * 支出 | ・ 生保申請関係 | 144,389 |
| | ・ 夜回り | 38,857 |
| | ・ 支援企画 | 580,154 |
| | ・ 調査費用 | 35,025 |
| | ・ 通信費用 | 67,758 |
| | ・ 事務用品 | 9,268 |
| | ・ 広報費 | 45,511 |
| | ・ 2000年度総会 | 72,839 |
| | ・ その他 | 16,000 |
| | 計 | 1,009,801 |
| * 残金(来年度繰越金) | | 966,269 |

上記の通り2001年度会計決算を報告します。

2002年3月17日

会計
代表
事務局長

藤堂美紗子
椎名恒
南部葵

前年との比較

去年の支出は750,838円で、今年がその約26万円増しでした。生保申請関係と調査、夜回りでの支出が増えたということです。

前年に引き続き、今年も予算が余るという結果になりました。理由のひとつには、今年からは従来の健康生活相談会に加えて、夜回り、実態調査など新しい企画を立てたため、予算がたてられなかったこと。ふたつめは、この会の大きな財源となっているのが寄付金と募金会からの助成金であるということです。定期的で確実な収入源を持たないため、来年に

残すために、どれだけ使えばよいのかわかりませんでした。

健康生活相談会や夜回りに関しては、去年おととの記録をもとに予算を立てることができるようになりましたので、その範囲で来年度の予算を年度始めにも立て、繰越金を有効利用したいと考えます。

風呂券

風呂券は健康生活相談会、調査時にひとり1、2枚を配布していましたが、銭湯組合さんから本会に入浴マナーについて注意の連絡がありました。組合長さんとの話し合いの結果、入浴マナーについての注意書きを配り、銭湯利用者に説明をしたうえで風呂券を配布する、ということで配布が継続可能になりました。

名簿の管理、お礼状

今まで滞っていた寄付金に対するお礼状や会員登録のお知らせの発送作業が今年度になってようやく始まりました。担当者の不行き届きから、未発送や発送の遅れがでましたことを深くお詫びいたします。来年度は名簿の管理もあわせて、本会の活動に協力して下さる個人や団体に対してしっかりとした対応ができるよう、努力いたします。

振替口座

寄付金や会費の振り込み専用の、郵便振替口座を今年の10月に作りました。これからはこちらをご利用ください。

口座名称 「北海道の労働と福祉を考える会」

口座番号 02730 - 0 - 37163

支援物資

皆様からは寄付金の他に衣類、タオルや石鹸などの日用品、食料、寝袋、毛布をたくさん頂きました。これらは健康生活相談会や夜回りで、また、旭川でも配布いたしました。

最後に

皆様からいただいた寄付金、支援物資はこれからも路上生活者支援のために、大切に使用させていただきます。あらためてお礼申し上げます。また引き続き、皆様の御協力をよろしくお願い申し上げます。

5. 質疑・応答（学生の声を含む）

ここでは本会に関わりのあった学生・教官の声として、一部の学生・教官の感想をアイウエオ順で掲載しました。

安部薫道 北海道大学法学部一年

私は大学の後期の授業が始まってから現在まで、ほんの半年に満たない間だけ会に関わらせていただきましたが、その限りで思ったことを書きたいと思います。

まず初めに、事務局会議に顔を出すたびに先輩達の様々な意見を聞き、考えに触れることによって自分にとってよい刺激になったと思います。会に携わる動機やホームレス観等は人それぞれだと思いますが、色々な考えが会を動かしていく力になっているのだと感じました。

もう一つ思ったことは、会が一つのシステムとして機能しているということです。もしかしたら押し付け等があるのかもしれませんが、皆さんが何かしら自分の役割を持ち、責任を果たしているように思います。暗黙のうちに、一人では何もできないというのがあるかもしれません。個人個人が妥協し協力しあって会のシステムを支えているのだと思います。できればこれからも会に関わりたいと思います。

桂守弘 札幌医科大学四年

私は、今年の2/18の事務局会議に始めて参加させていただいて以来、今回の支援企画への参加と、全てが初めての経験で、1年の感想といいましてもしっかりとした物が書けないと思いますが、私なりに今回の支援企画を通じて感じたことを簡単に述べたいと思う。

私は、去年の年末に大阪の釜ヶ崎で数日間、路上生活者への支援活動に参加させていただいて以来興味を持ち始めた。札幌でもそういった活動をされている方がおられないかと周りの人に尋ねてみると、みんな一様に北海道みたいな寒い所に路上生活者はいないのでという返答が返ってきた。そうなのかとも思ったが、自分なりにいろいろと調べてみると、路上生活者と関わっておられる人達がすごく多いことが分かり、2/23の生活・健康相談時に80人以上の方が来られた時には、私の認識の甘さを痛感した。

まず感じたのは、自分が住んでいるこの日本、いや札幌にも、こんなに多くの問題があるのだという事に気付いた事だ。生活保護、救護施設、路上生活者の医療、家宅保護後の自立した生活、など自分が今まで考えもしなかった問題が、こんなにも自分の身近の問題として存在していることに初めて気付いた。今まで、途上国など海外にばかり目を向けていた自分が恥ずかしくなった。

実際、直に路上生活者の方と接してみて、本当に多くの事を感じ学ぶことができた。それぞれの人にそれぞれ路上生活に至った背景があって、話してみると、やはり路上での生活から抜け出して昔のような家のある生活に戻りたい、生活保護を得て仕事を見つけないかと思っている人が多かったように感じた。今回来てくれた方でも物資配布で帰ってしまっ

た方々や、話しができなかった方々、こういった活動には一切参加されない路上生活者の方も大勢おられるので、そういった方が何を感じて生活されているかは今の私には分らない。しかし、私達と真剣に話しをしてくださった方はみんな、今日生きるのにも何かのサポートが必要である人達ばかりであったということは明らかであった。

また、医学生としても感じる事がいくつかあった。糖尿病や高血圧、職業病などの産業保健問題、などを抱え、今すぐにも治療が必要な人が大勢いるにもかかわらず、なかなか医療を受けることが困難な現状には、自分に何ができるのかを考えずにはいられなかった。これから、医療面という側面からも問題に目を向け、病に苦しむ人達が適切な医療を受けられるような環境、病に至らないよう予防できる環境について学んで行きたいと思った。また、健康相談でも、もし血圧測定や尿検査、問診などの進め方に改善の余地があるのであれば、少しでも力になればと思った。

これから自分が具体的に何をすればいいのかはまだ分からないが、『支援』のために、大学生には大学生の果たせる役割があるのではないかと思う。それは誰かを支援することでもいいし、自分の知識を増やすことでもいいのではないだろうか。自分たちには何ができるのか、自分たちの役割は何なのかを常に模索していき、そしてそのやろうっていう行為自体が『支援』になっていくのではないかと思う。それが、中明さんが述べていたように、路上生活者に対しては、ヘルプというよりはサポートという形で支援につながっていけばいいと思う。

最後に、今回初参加の私を心よく受けいれていただき指導していただいた「北海道の労働と福祉を考える会」のみなさんと、他人には話したくないようなことまで話してくれた路上生活者のみなさんに心から感謝したい。

小西祐馬 北海道大学教育学部修士課程一年

ゼミの先生から調査に誘われて、何となく参加してから、もう2年以上にもなる。当時は、「北海道の労働と福祉を考える会」もなく、会ができてからも、こんなに活動が広がるとは、そして自分がここまで野宿者の人たちと関われるようになるとは思っていなかった。

しかし、同時に、「貧困」という問題に立ち向かおうとしている者にとって、この「ホームレス問題」にぶつかるのは必然的だったとも思う。だから、学生時代というある程度時間に余裕のある時期に、こういった活動に深く関われたことは、僕にとっては非常に意義のあることだった。特に今年度は、何より野宿の当事者の人たちと直に接する機会を多く持て、自分なりの「援助」のあり方のようなものが、おぼろげながら見えてきたような気がする。「貧困」の本質的な意味も、本の中でではなく、実際に体で感じ、新たに考えさせられることが多かった。

来年度は今年度ほどは関われないと思うが、別の形でこの問題を「考え」ていきたいし、一生考えていく気がする。

近藤修平 北海道大学教育学部三年

今年度、私的な事情から当会の会議にあまり参加できなかった。そのような私が今年度の労福会での感想や反省を述べるのは差し出がましいかもしれないが、その点についてはご容赦願いたい。稚拙な文章ではあるが、以下に今年度の感想を述べさせて頂こうと思う。

労福会の活動を振り返るとき、私はいつもこの会発足当初を思い出す。全くのゼロから始まったこの会に参加することを決めたとき、路上生活者の方々の生活を支援したいという気持ちは勿論あった。しかしそれ以上に、自分自身にとっての勉強・刺激の一環にしたいという心情の方が強かった。初めてエルム公園で炊き出しをしたとき、労福会が現段階まで活動の幅を広げるとは殆ど予想していなかったが、この会に何らかの形で関わっていくことが、自分にとって確実にプラスのものとなるだろうと感じたことを今でも覚えている。あれから2年と数ヶ月。幾度にも亘る炊き出しやピラ配り、生活保護申請と、それらに必然的に付随する様々な出来事や問題点が現れてきた。メンバーも発足当初とは随分異なってきたが、課題を皆で話し合い、少しずつ解決しながら現在に至る点は評価されて良いのではないだろうか。言うまでもないが、それが実現できたのは学生の力のみではなく、直接的には見えない所で当会を支えて下さった方々のお蔭でもある。

いま、当会の活動に課題や問題点がないとは決して言えない。会内外から常時投げかけられる意見・感想や批判等からもこのことについては論を待たないが、労福会の参加者たちは自分たちの活動の軌跡を顧みこそすれ、現状に満足し、自省を怠る傾向にあるとは思わない。私のただの買い被りかもしれないが、炊き出し等の諸活動に参加するたびに、事務局長や1～2年生の方々は十分頑張っているように感じられる。自分が仮に1年生や2年生だった時分、今の労福会の活動に彼らほど貢献できただろうかということを考えると、彼らに対して敬意を払わずにはいられなかったし、それは同時に、私に良い意味でのプレッシャーともなった。そのおかげで、私個人も活動参加を通して非常に勉強になった。

この会の今年度の活動は、昨年度のそれと比して大きく飛躍したとすることができ、それはすなわち、参加者の負担と責任が大きくなったということでもある。今年度の活動を元に来年度より一層洗練されたものとするのならば、この点は多少の考慮や検討が必要となるとときが来るかもしれない。つまり、炊き出し等の企画の慣れから生じる、意識面における無意識的な油断、気の緩み（例えば、活動内容の粗雑化や企画内容を鋳型に押し込めてしまう等）である。それは普段から気をつけていても生じる僅かな隙のようなものでもあり、何か問題が生じたときに改めて再認識されるケースが多いものでもあろう。会も発足して3年目を迎え、当初のマニュアルなどなかった状態から少しずつ移行し、一部の活動内容には『踏むべき手順』のようなものが存在するように成りつつある、或いは既に成っている。だからこそ、いま必要なのは、“いま、路上生活者の方たちは何を自分たちに求めているのか”を常に斬新な視点で窺い見ることであり、“自分は何を思い、感じ、どうしてこの会に参加しているのか”を常に意識しておくことなのかもしれないと思う。

来年度になれば、私は現段階よりもさらに当会に参加できなくなると思われるが、微弱

ながらも継続的に力になって行きたいと考えている。

佐々木朋子 北海道文学部二年

労福会に関わりはじめて、早いものでもう一年半が過ぎました。色々な事があったはずなのに、振り返るとあっという間だった気がします。それはきっとこの会が、後ろを省みる時間も惜しんで前へ前へ進んでいった、あるいは進まざるを得なかったからでしょう。

ある路上生活者の方がこう言いました。働きたいけど、いくら探しても仕事が見つからない。はきはきとした口調の、40代の男性でした。私はただ相づちを打つしかありませんでした。

労福会は、今のところ本格的に雇用情報を提供する活動はしていません。その前段階での課題が山積みになっている以上、今後も難しいと思われれます。

しかし「難しい」「出来ない」と早急に判断を下す前に、「何とか出来ないだろうか」という意見がいつも出てきます。そうした前向きな姿勢こそがこの会を動かしてきた最大の原動力でした。そして、多忙なスケジュールを縫って実際に中心で働いていた人達は、非常に素晴らしかったと思います。

振り返ってみると、自分としては実行できなかった事や、反省点ばかり思い浮かびます。この会で活動した一年間は、自分に出来ることの限界に気づいた一年間でもありました。それでも限界と理想の間で、まだこの会に自分が出来ることを考え続けたいと思います。

佐々木宏 北海道大学教育学部助手

今、外国で、この文章を書いている。忙しい年度末に出張のためとはいえ、長期不在となり活動の締めくくりに参加できなかったことは、『副代表』などという大層な肩書きをいただいている人間としては反省すべきことだと思う。と同時に、今年度の事務局の皆さんと一緒に総会までの気苦労を共有できなかったことはとても残念だ。これは、今年を振り返ったときの僕の率直な思いである。

とはいえ、『副代表』がいなくても、活動が滞りなく進むということは、今年の事務局の力を示すものだと思う。尤も、北海道の労働と福祉を考える会の『代表』『副代表』などというものは、当初から「かかし」みたいなものであったと思うが...（だから引き受けている）いずれにしても、今年の活動の傾向の一つは「学生による野宿者支援」という会の看板が、ホンモノになりつつあるということだ。僕は、D.C.院生などという学生とも社会人ともつかぬ立場にあった時、初代事務局長に非民主的に（選挙もなく）就いていたが、現在は三代目の時代となり、参加する学生が自ら選んだ事務局長のしきりによって活動が進んでいる。また、初めは『代表』『副代表』『事務局長』などという看板を背負った一部のメンバーだけが関わっていた、生保相談への同伴やその後の個別的なフォローといった活動が、ほぼすべてのメンバーに広がっていったことも今年の大きな特徴だ。僕は、別に「学生中心」であることに特に意義を認めているわけではないが、メンバー（実質上、大学生

中心)の多くが会の活動に積極的にに関わり、各々が充実感を見出しているとするれば、ボランティアな活動としてはとても健全なことだと思う。

また、もう一点、今年を振り返ったときにいえるのは、個々の野宿者への関わりが深くなったことである。これは、相談会に加えて、夜回りを頻繁に増やしたことや生保相談を中心に当事者に添った対応を繰り返した結果であろう。活動以外の場面で、大通りや札駅で当事者に会った時に気軽に話が出来る関係を個人的に持っているメンバーも今年が多いのではないかと。給料をもらっていないという次元でいえばプロではない我々にとっては、できるかぎりという条件が常につきまとうが、「当事者に寄り添うこと」は、僕は野宿者支援の基本だと思う。ただし、個々の当事者との関係が密になるということは、それだけ、支援の難しさの深みに自らはまっけているということでもある。僕は、はまれば、はまるほど支援活動がホンモノに近づくと信じているが、当事者に相対して彼らに寄り添うことの「重さ」を感じ、引き気味になる瞬間がないといえウソだ。今年、生保相談やその後のフォローに関わっていて、僕と同じような印象を持った人も多いのではないだろうか。紙数が足りないの、この点についてこれ以上触れないが、この「重さ」から逃げ、目をつむることなく、かつ背負い込み過ぎて潰れるわけでもなく、というある種の楽観的な姿勢が、今後必要になってくるのだと思う。

ともかく、今年活動が大きく飛躍したことは間違いない。その中で、当然、組織化も徐々に進みつつある。が、僕は、この会が野宿者支援について素人集団であることが大好きだ。来年度も、少なくともメンタリティの面では素人であり続け、ともに悩みつつ活動を続けていければいいなと思っている。

佐藤学 北海道大学教育学部三年

「北海道の労働と福祉を考える会」、今年度も総会が行われる。僕は今回で2度目の参加だ。この総会が終われば事実上僕は引退だ。思い返せば大学一年生の終わりから、現事務局長の南部にだまされて参加したようなものだった。参加当初から文句ばかり言っていた。こうして事務局員となって支援企画担当になるとは思ってもみなかった。

こうして感想を書く機会もこれが最初で最後かもしれない。どうせだから思い切りクドイ文章を書こう。うん、それがいい。何と言っても僕は文句たれだから。

対象となる存在は、別に路上生活者でなくてもよかった。障害者だろうが貧困層だろうがいわゆる「社会的弱者」とそれに自発的に関わりとされる「ボランティア」という存在に惹かれた。その両者の関係について自分としてしっかりとした考えを持ちたかった。振り返ればそれがこの会に関わり続けたひとつの理由かもしれない。だから僕は、何度も他の参加者の発言に違和感があった。いまでもある。だって僕は文句たれだから。

苦しんでいるように思われる人々がいる。大変な生活をしていそう。家に住んで食事をとることが当たり前の生活を送っていれば、彼らの生活は救われるべきものだ。「救う」という表現に問題があれば別に「サポート」でも構わない。要は現状に変化をもたらす方

向で考える点では大差はない。

だから自分に出来る範囲で彼らに何かをするべきだ！そうだ！しかし単純にそう考えてしまってよいものだろうか。いや、よくない！彼らは路上で生活しているからといって蔑まれるべき存在ではない。だから彼らに接するときも「してあげる」という発想ではなく「多くを学ばせてもらっている」と考えるべきだ。うん。すばらしい。この考えには文句のつけようがない。いや、ある。なぜなら僕は文句たれだから。

そもそも今述べたような発想にはひとつの混同が見て取れる。確かに路上生活者であることのみで、その人の全人格を決定し、上下関係でいえば下に位置されてしまうことは問題があるように思われる。しかし、実際の間人関係において上下関係は厳然と存在しているのではないか。教師が生徒に「教えさせて頂くことで多くのことを学ばせてもらいました」という発想になるのか。確かに教師が生徒に教えるという行為を通して多くのことを学ぶことはあったとしても、教師と生徒の間にある関係はそれだけではないはずだ。教師は「教えてあげている」し、生徒も「教えてもらっている」という関係があるのではないか。それはボランティアでも同じではないだろうか。むしろ「してあげる」という発想を忘却するために「～させてもらっている」という発想を用いることの方がよっぽど危険なのではないか。

この手の議論に結論をだすことは、結局できなかった。日々の忙しさに追われ本来もっていたはずの問題意識を忘れ、ただただ漫然と仕事をこなす日々だったよう気がしてならない。しかし、だからといってあきらめるつもりもない。なぜなら僕は文句たれだから。こうした議論は解かなくてはならない問題のひとつである。いつか、何らかの形で自分なりの結論を出したい。

最後に、というか最後まで文句をたれてしまった。なぜなら僕は文句たれだから。しかし、ボランティアに対してどんな考えをもっていたとしても、ボランティアに関わることなく文句をたれることだけは避けてきたつもりである。その意味では、こんな文句たれの文句に丁寧に答えつづけて来てくれた“労福会”には感謝したく思う。もしかしたら不快に感じる人がいるかもしれない。結論をださないままで申し訳なく思うが、以上がこの会に関わりつづけた者としての正直な感想でした。次期事務局員をはじめ会員のみなさまにはいっそうの活躍を願うばかりです。おしまい。

椎名恒 北海道大学教育学部助教授

会はこの1年間の活動によって、学生の学生による自主的な活動として定着しつつあるように思います。それを通じ十分かどうかはともかく北海道のホームレス問題での社会的発言権と信頼を広げ、何よりもホームレス自身の信頼も強まってきました。会の活動の傍らに居て、時には共に行動し多くのことを私自身学んできました。

第一に、この会の役割としての最大のものはホームレスの自立支援という社会的な活動にあることは当然ですが、同時にそうした活動がメンバー自身にとっても持った意味がメンバー自身から率直に語られるようになってきました。

その意味とは、ホームレス問題の専門的研究上で役立つ場合もあるでしょうが、大半のメンバーは多岐にわたる大学・学部・専攻分野にまたがっています。そして専門的な研究対象というより、ホームレスと彼らをめぐる現実社会に実際に触れ、意識的にそれに働きかけ、また学び、広い視野から考えることの魅力にあるように思います。

言い換えれば「教養は人の生き方であり、一人一人が自分の生き方を社会との接点を求めて考えていくこと」(阿部謹也：『学問と「世間」』、岩波新書)ということそのものが魅力だということに外なりません。会の出発点の一つになった**一般教育演習**での多様な社会調査実践は、上述の理解がその初発から妥当していたことを示唆しているように思います。

第二に、このような意味での「教養」を修得した、あるいは修得しつつある学生の社会性、正義感や行動力を改めて痛感しました。メンバーの学生諸君は、授業・サークル活動・アルバイト・卒論・就職活動・デート等などの合間を縫って、ホームレスの訴えに耳を傾け、相談に乗り、夜回りをし、役所の生保の相談に同伴し、ホームレスの期待にこたえる成果を挙げてしまいました。こうした活動を支えたものとして想起されるのは、歴史家の上原専禄がいう上と同じ本に紹介されている以下の指摘です。すなわち「学芸は、政治とともに、経済とともに、社会とともに、迷い、苦しみ、嘆き、又それらとともに悟り、楽しみ、悦ぶことを敢て嫌うべきものとなさず、沉んや恥ずべきこととはなさないのである」(『同上』より)。このなかで「学芸」として語られている内容を、メンバーは活動を通じて“わがもの”にしてきたと考えることができるように思います。その内容とは、ホームレスの苦しみや悲しみへの共感、役所の対応への疑問、同じ苦勞をしながら努力している仲間との語らいの喜び、あるいは政治や経済情勢についての自由な意見交換、その他数え上げればきりがなほのゆたかな内容です。

第三に、学生たち自身が、学生として出来ることをしたいという立場で、支援活動を通じて各人が“わがもの”にしようとしてきた社会的現実としての札幌のホームレスについて、はじめての本格的な調査を行ない、自らの手でそれをまとめたことは、その内容はともかく、会の活動の新しいページを開くものです。この作業が今日の失業や貧困問題研究と重なりながら、独自の位置をもつホームレス研究への貴重な社会的貢献となっていくことが期待されます。もちろん専門的な研究に求められている課題は多岐にわたり残されていますが、会が「**考える会**」であることの意味を実現していく一歩として単なる個人論文

ではない、会らしい活動成果の実現となることを共に喜びたいと思います。

以上に一端を示した会の前進が示したものは、今後さまざまな困難があっても、会が貴重な成果を得ていく条件が存在することを示すものです。その意味で現時点では、2年半前の会設立時の方針や方向づけ、その後の会のあり方は基本的には妥当なものであったと考えています。それらを踏まえたうえで、ホームレス調査の報告や活動の経験を一冊の本にまとめ出版したい(仮題「日本最北端のホームレスと学生たち - 支援活動と調査の中から - 」)というささやかな夢も一歩実現に近づいて来たように思っています。そのためにも、私自身、**たばこを吸い続けつつも**身体をいたわり、置いていかれないように一緒に歩み続けていきたいと念じています。最後になりましたが、会活動を時には批判し、また支え、励まし、協力してくれた、会内外の教官、福祉・医療関係者、各種専門家、個人や団体の皆さんに心から御礼申し上げたいと思います。

藤堂美紗子 北海道大学文学部二年

2年前の旭川調査の時、雨が降る夜の公園の東屋で、路上生活をしているおじさんに会った。おじさんは、よく目をこらさないと見えない暗がりのなかで、オリンピックのラジオ中継をきいていた。こんな寒くて暗いところに人がいるなんて。失礼ながら、とても驚いた。「どんなことを考えて、どんな生活をしているのだろう。」このような不謹慎な好奇心から、健康生活相談会に参加した。

会計と物資の管理をやっていてとくに思うのだが、いろんな人や団体がいろんな思いで路上生活者に支援しているんだなあ、ということ。カンパや衣料品を受け取るたびにそう思う。これもまた驚きだった。

しかし、会の仕事が増えるにつれて、単なる驚きだけではやっていけない部分があるということが分かった。それ以上のことをやるかやらないかを決めるのは自分だが、私はまだ驚き以外のはっきりとした動機が見つけれないでいる。今年はそれを自覚した。

南部 葵(事務局長) 北海道大学教育学部三年

この1年はただひたすら走り続けてきたという感じだった。事務局長という立場に立ちながら、果たして今、自分たちがやっていることが本当にベストなことなのかどうかを自問自答する日々が続いていたように思う。

路上生活をしている人たちと接し続けていくうちに強く感じたことは、当事者だけの問題でなく社会の問題なんだということだった。今、自分は当然のごとく温かい部屋で生活し、1日に3度の食事を取っているが、もし自分が置かれている状況がちがっていれば彼らと同じように路上で生活していた可能性もあると感じさせられた。ただほんの少しだけ、生まれ育った環境が違っただけなのかもしれない。それなのに、ひとたび路上での生活に入った人たちに社会は厳しい。さまざまな状況があるから一概にはいえないものの、不況、家族の問題、社会制度上の障害など当事者ひとりの努力だけではどうすることもでき

ない事柄が、実に多いことがわかった1年でもあった。

「自立を支援する」とはいうものの、自分たちが、いや自分がどこまで関わったらよいのかについては、活動をするたびにいつも悩んでいる。「無責任」、「偽善」、「自己満足」。これらの言葉が「悪」を意味するかどうかは判断つきかねるが、「それだっていいじゃない」とある意味開き直れたことが活動を続けられた理由だと思う。周りにどう評価されるかが大切なんじゃない、自分で正しいと思ったことを続けることが今の自分にとって大切なことなんだと自然に思えるようになった。たいしたこともしていないのに、当事者から感謝されることがある。やっぱり自己満足にすぎないのかもしれないけれど、この感謝されたという事実、また逆に当事者から批判されたという事実は大切に受け止めながら活動をしていかななくてはならないと思っている。

最後に、特にこれは事務局長という立場を通じてだが、何かをしようとしたときに一人では何もできないということ強く感じた。これからこの活動がどのような広がりをしていくのかは、まだわからないけれど、さまざまな立場の人が無理をせずに関わるということが重要だと思うし、むろんぼくも可能な限りで協力していきたい。来年度以降の人たちの活躍に期待しつつ、今年協力してくれた多くの人たちに心から感謝します。

一年間本当にありがとうございました

埴朋子 北海道大学教育学部二年

私は昨年夏から会に参加してきました。この会に参加する以前は、大通公園やJR札幌駅などで「ホームレス」のかたを見かけることがあって、彼らがどんなことを考えているのかなぁとか、どうやって睡眠や食事をとって1日を生活しているのだろうか、ということをおもったりしていました。夏に調査を手伝ってはじめて支援企画に参加して、「ホームレス」の方とお話をして、たくさん考えることがあったのですが、「本当はこのような生活をしたくはない」というかたが大勢いて、そこにどのような困難があるのか、ということを知りたいと思う同時に、私たちがすることはどういうことなのであろう、ということをおもえながら参加してきました。ただ、この会が、当事者の方とかかわる中で、目に見えるものでなくとも当事者の方々にとって選択肢やきっかけをひろげることになっていたり、そういう「場」であることはいいことじゃないかなぁと思いました。それとともに、私も「ホームレス」の方とかかわる中で、会の皆さんのと一緒に活動する中でいろんなことを勉強させてもらったと思います。それまでこのような活動や勉強はしたことがなかったし、わからないことばかりでしたが、路上で生活されている皆さんや会の皆さんに出会えたことは私にとってとても大切なことであると感じました。

人見泰弘 北海道大学文学部三年

会の活動は3年目に入り、今回2度目の総会を迎えた。会の活動は年目を重ねるごとにより拡大してきているように思う。そうした事を通して自分が頭の片隅で考えてきたコトをここで少し降り返ってみたい。

この1年間、むしろそれ以前よりこの活動を行う中で何かしらの「ズレ」を感じてきていた。2年前は何気なくこの活動に関わり始めていた。むしろその頃は参加に対して特別な理由はなかったという方が正しいかと思う。そうしているうちに会の活動は次第に拡大し、それに伴って内容も濃くなっていった。しかし、そうした中で「自分がやっている事」「自分がやっていく事」に対する自分自身への答えが出せずにいた。そこに無回答なまま活動をするという事の「ズレ」を感じ、時にはそれが疑問や違和感になっていたのも事実である。

この1年間、特に最近はその解を導くことを1つの課題としてきた。今はおぼろげながらその形が見え始めたか、という段階に来たつもりでいる。だがここでそれを示すにはまだ不十分であるし、またそうした必要もないと思う。1人1人の会への参加理由は異なるだろうし、また今の意見を唯一解とするつもりもないからである。

それでも自分にとって1つだけ確かなことは、その「ズレ」が少しだが修正されてきていることである。それが完全に解消されることはおそらくないのかもしれない。それでもそうした変化があることが、この1年間の活動をしてきた自分への答えであると今は考えている。

古澤明 北海道大学文学部四年

私は昨年度から参加しておりますが、今年度1年間を振り返ってみてまず感じることは、昨年度と比べて忙しくなったなあ、ということです。それは会に継続的に参加する人間が減ったということと、会の活動内容が増えたという2つの理由によるものだと思いますが、この1年間は、目前の問題に取り組むことで精一杯でとても忙しいものであり、会の方向性や目的、運営体制などといった長期的な問題に取り組む暇のないほどであったと思います。

そのような忙しさのなかで、会での自分のしていることに対して疑問をもつようなこともあったかもしれません。自分は何のためにこの会に参加しているのか、この会の活動は本当に路上生活者の役に立っているのか、等々。路上生活者自身からも時には非難の声もあったかもしれません。路上生活者の置かれている状況、そして会の状況を考えると、より良いものにしようとするあまり、つつい現状に対して悲観的な考えをもってしまいがちになります。

現状肯定というわけではありませんが、たまには自分のやってきたことに対する満足感を感じることも大切なのかもしれません。この広い北海道の中でもこのような活動をしているのはこの会だけだといっても過言ではないのだから。来年度は、とくに年度始めは参

加者が減って大変かと思いますが、どうぞ無理のないように。細く、長く活動を続けて欲しいと思います。この会にはなくなって欲しくないと思っていますので。

最後になりますが、2年間どうもお世話になりました。機会があったらまた参加させてもらいたいと思います。

山内太郎 北海道大学教育学部修士課程二年

この会にとって2001年度というのは走り始めた速度をより加速させた年だったと思います。路上生活者に対してどのようなかわり方があるのかを考えつつ、おっかなびっくりに活動を行ってきた昨年度に比べて、生活保護の同伴や夜回り、聞き取り調査、HPの立ち上げなど具体的に動いてみるというのが今年度の大きな特徴でした。もちろん会にとってその活動がどのように位置づくのかという議論はまだまだ詰めなくてはならない点もありますが、逆に学生が主体で活動をする「北海道の労働と福祉を考える会」がやれること、やるべきことを会にかかわった学生全員が考えなくてはならないと自覚できたのではないのでしょうか。その意味でこの1年は会にとって非常に重要で有意義な年であったと思います。

また、会が設立してもう2年を超えることになるのですが、あらためて思うことは、継続して活動することがとても重要なことなのだということでした。この1年の間にも様々な方が様々な形で会のことを知り、関わってきたのですが、これも活動を継続して行えばこそだと思います。また同時に様々な方が関わってくれたからこそ継続して活動が行えたともいえ、その意味で会との関わりを持つ人との関係を大事にしながら、継続的に活動をしていくことが来年度以降も重要なのだと感じました。

山下未知瑠 北海道大学法学部二年

労働と福祉を考える会に関わるようになってから、1年半余りが経った。前は誰かがこっちだ！って引っ張っていてくれる方向に、そんなに賛成ってわけでもないけど、他にはっきりした道を指し示せるわけでもないし、とりあえず便乗してから考えようというノリで、文句は言うけど責任は負わない気楽な身分だったけど、年月が知らぬ間に進み、医療大で話す機会があったり、企画を自分でしてみたりするなかで、もう傍観者じゃいられなくなってきて、一応自分の発言は自分の責任になって行って、全然何が正しくて、合っているのかなんて分からないまま、それでも自信がなくても何かこっちって決めて進むこと、後からやっぱりあれはなんか変だったとか、いや良かったのかもとか出てきてまた決めて進む。それが、向上していているのかは疑問だし、人は頑張っていけばどんどん良い方向に進むなんて思っていないけど、ちょっとずつ変わっていくわけで、森の奥深くに迷い込むかも、湖に落ちるとか、トラの洞穴と宝の洞窟と勘違いとかしちゃうかもしれないけど、今居る所が嫌だったりするなら、とにかく自分でこっちって決めて進むしかない、だったら溝にはまっても嫌だけどそう悪い気もしないかも。とちょっと労福の活動以外のことも

入ってるっばいけどそう思います。

山田敏之 北海道大学教育学部三年

会に参加している、といっておきながら、いわば一歩引いたような感覚でいつもいたと思う。正直なところ面倒だということもある。生活保護の同伴をするだけで、半日つぶれてしまうことがあった。自分には（もちろん僕に限ることではなく、参加者全員についていえることだが）授業がある。それをサボってまでどうしていかなければならないのであろう。会で使用しているメーリングリストから流れる報告を見ていると、終日同伴等に費やされてしまった、という場合が実に多い。どうしてもそこまで参加したいとは思わない。そのため、企画等では常に会場の外で案内をしていた。

一方で、自分には荷が重いという感覚も常にあった。やったところで保護の許可がもらえらるという確証もないのに、その人を引っ張りまわして、徒労に終わることを考えれば、常に憂うつであった。その人の人生を背負う（おおげさであるが）と僕は考えてしまう。そんなことはもとより無理な話であり、

来期を担う人間のことを思うと、おいそれと辞めたの言うのは無責任と思い、引き続き事務局の一員として名前を掲載するが、この中途半端さでよいのか。常にそういった疑問が付きまとう。

6 . 来年度役員を紹介

顧問 杉村 宏（法政大学現代福祉学部教授）
代表 椎名 恒（北海道大学教育学部助教授）
副代表 佐々木宏（北海道大学教育学部助手）

今年度は以下のメンバーで会の運営をしていました。

事務局長 南部葵（同大学教育学部 3 年）
事務局幹事 山内太郎（同大学院修士課程 2 年） 小西祐馬（同大学院修士課程 1 年）
古澤明（同大学文学部 4 年） 佐藤学（同大学教育学部 3 年）
坪田裕佳（同大学教育学部 3 年） 人見泰弘（同大学文学部 3 年）
山田敏之（同大学教育学部 3 年） 佐々木朋子（同大学文学部 2 年）
諏訪絢子（同大学法学部 2 年） 藤堂美紗子（同大学文学部 2 年）
山下未知瑠（同大学法学部 2 年）

今年度の役員から来年度に向けて新体制でスタートします。

事務局長 諏訪絢子（北海道大学法学部 3 年）
副事務局長 埴朋子（同大学教育学部 3 年）
事務局幹事 山内太郎（同大学教育学部博士課程 1 年）
小西祐馬（同大学教育学部修士課程 2 年）
近藤修平（同大学教育学部 4 年） 佐藤学（同大学教育学部 4 年）
坪田裕佳（同大学教育学部 4 年） 南部葵（同大学教育学部 4 年）
人見泰弘（同大学文学部 4 年） 山田敏之（同大学教育学部 4 年）
佐々木朋子（同大学文学部 3 年） 藤堂美紗子（同大学文学部 3 年）
山下未知瑠（同大学法学部 3 年） 安部薫道（同大学法学部 2 年）